

「国民の健康を考えるー生命エネルギー（情報）医学事始め」

全国柔整鍼灸協会会長・新時代戦略研究所 (INES) 代表取締役

元経済企画庁長官・元労働大臣

近藤 鉄雄

【近藤】 私は近藤鉄雄ですから皆さんにコンテツと呼ばれています。国会議員を24年やりました。最近はいろいろなことをしています。その1つが全国柔整師協会の会長です。私は大臣を2回やったものですから、勲一等旭日大綬章という勲章をもらいました。そういう最高の勲章をもらった人に会長になってもらいたいと協会の方々からお話がありました。私は前からこういう分野に関心をもっていたものですから、それではひとつ皆さんと一緒に勉強させてくださいと、お受けした次第です。

私は政治家として一番大事なことは、人を見る目だと思います。加藤紘一君は私と同じ山形です。大体同じ時期に国会議員になって、彼は将来を嘱望されたホープだったのですが、なぜ失敗したのか。それは彼に人を見る目がなかったからだだと思います。彼は佐藤という秘書を使っていた。私たちは、あんな人を使って大丈夫かと思っていたのですが、結局あの佐藤秘書のために加藤君も議員辞職におこまれてしまった。

政治家という仕事をしていますと、大勢の人がどんどん会いに来ます。いろいろな陳情を持ってくる。

こういうことがある、ああいうことがあるから何とかしてくれとです。それを速やか処理していかなければならない。そういう判断を速やかにしなければならないわけです。そうすると、何よりもまず人を見る目をもたなければならない。この人は信用していい、この人は心配だ、この人はいい加減だ。それぞれ瞬間に判断しないとやっていけません。西原先生は、だれが見てもすごい学者で、まじめないい先生だと思うでしょう。それは顔を見て感じるわけです。ある人を見て、ちょっとこの人は危ないな、つき合わない方がいいなと思うこともあるのです。

そう考えてくると、心が先か、形が先かという問題になる。これは昔から議論されてきたことです。

私は心が先ではないかと思うのです。心といういわばソフトウェアといってもいいものが先にあって、そういう心の現象として外形ができてくるのではないのでしょうか。しかし心というか思いというか、基本ソフトが外にあらわれるのは人間だけではない。例えばライオンです。これはどう見たって、百獣の王と言われるにふさわしい貫禄があります。ではウサギはどうでしょう。どう見たってこの動物にすごいパワーがあるとは思わない。やっぱりウサギは可愛い動物という形をしている。蛇だって毒蛇だと本当に毒々しくて怖い。だけど毒のない蛇は、あんまり楽しい生物ではなくても我慢できる感じです。心というか意欲とか内に秘められてある基本的な何かが、形になってあらわれるのは人間や動物だけではない。

花だってそうです。桜の花はパーと咲いて、しかも淡々として散り際がよいから、みんなに好かれる。いまの日本人はともかく、昔の武士がそうだったということで、日本人の魂を象徴する日本の国花といわれる。ダリアはダメになっても頑張るから、最後には汚くなる。桜とは大違いです。キノコでも、マツタケなんかはすっきりとしていておいしそうでしょう。毒キノコは形からしても変です。だから私は思うのです。心というか、思いとか、意志とか、霊か魂とか、よくわからない

けれども、そういうソフトウェアといったものは人間だけであって、ほかのものにはないというのは、人間の思い上がりではないかということです。この世界を創造した神様があるとすれば、神様は世の中をそういうふうに人間だけでは特別に創ったのではなかったという気がするのです。

私は若い大蔵省役人時代に、当時「電力の鬼」といわれた松永安左衛門さんにかわいがっていただいた。97歳でお亡くなりになった財界、産業界の大長老でしたが、僕みたいな大蔵省の若い役人を呼んで、一生懸命に新しい国際金融の話聞かれる。私はワシントンD.C.にある国際通貨基金(IMF)から帰ってきたばかりでした。この松永さんは耳が大きかった。

野田佳彦という若い政治家がいます。民主党のホープです。松下幸之助さんがいい政治家を育てようと松下政経塾をつくった。野田さんは松下政経塾の1期生です。そして非常に松下幸之助さんにかわいがられた。「あの大実業家の松下幸之助さんが、私みたいな学生の言うことを、何時間でも一生懸命に聞いてくれた」と野田さんは言う。松下さんもやっぱり耳が大きかった。このお三方はいろんなことを聞いて勉強しようという強い思いがあった。そうするとだんだんと耳が大きくなっていくのです。

キリンの首が長いのは、ダーウィンが言うように適者生存で伸びたのではなしに、このキリンという動物に宿った心とか意欲の中に、高いところにあるものを食べたいという必死の思いがあったから、首が伸びたのではないのでしょうか。そういう思いとか意志がまずあって、そしてそれを遂げようと努めるうちに身体が段々それができるように変わってくる。そうすると植物も動物も人間もそういうことができる形になってくる。内にその強烈な思いがあれば外の形がその方向に変形成長していくということです。そう考えてくると、基本はやっぱり魂にある。いまの流行り言葉でいうとソフトの核にあると言っていい。

この魂というのは生命情報システムと考えましょう。生命エネルギーシステムといってもいい。この魂というソフト・システムが外に現象した形態とし身体があるとすれば、病気とは何だということなのです。

病気というのは人体をコントロールしている魂のシステム、生命情報システムが健康のときは全体がとれて調和機能しているのに、その調和した状態がこわれて発生する現象ではないのか。魂のネットワークシステムが、普通は正常に機能している。ところがどこかの場所に異変が起こると人体に病気として現象する。異変があるというのはシステムが乱れる、ディスオーダーになることです。秩序が混乱してゆがむだとか、切れてしまうとか、破壊されるとかです。それで病気になる。そういう魂という生命エネルギー(情報)システムの不調から病気になるのなら、そこをチェックして直すことで病気が治らないかということです。柔道整復とか、はり・きゅう、マッサージはそういう仕方で生命エネルギーシステムに調和を回復させる技術です。システムにハーモニーがもどれば健康が回復する。はり・きゅうでは経路といいます。この経絡というものは私はよくわかりませんが、血管でもない、神経でもない、見えないものです。それでも経絡というネットワークシステムがあるのです。だからそこを刺激する、押す、抑えてみる、いろいろやっているうちに、ゆがんだはずみ、ディスターバンスが治って調整されると肩の凝りがとれる、胃潰瘍が治る、がんすら治ることがある。健康になるということではないでしょうか。

人間という知的生物がこの地上に生まれてきて物を考え始めたときにはじめて最初に思ったことは、健康をどうしたら維持できるかということです。もう1つは、死んだらどうなるのだろうかということです。親しい人がいずれ死んでいく。そうしたら彼らは死後どうなるのだろうか、みんな考えたに違いないのです。自分も死んだらどうなるのだろうか心配する。これは当たり前です。

だから、自分の健康をどうしたら維持できるかということと、死んだらどうなるかということが、人間が物心つき始めて最初に思ったことに違いないのです。

だから医学と宗教というのは、いわば人間が知的生物として最初に取り組んだサイエンス、すなわち論理的思考なのです。健康はどうしたらよくなる。これは医学です。死後の世界はどうなる。これは宗教とっていいでしょう。この2つは人間として最初の2大関心だった。ヨーロッパへ行くと、古い大学は医学校と神学校としてスタートしています。学生は医学と神学を一緒に勉強をしたわけです。いま医学は科学といわれる。一方、宗教は何かわからないから非科学的といわれる。しかし原点を探ってみるとメディカルスクールと神学校は同じ大学で学んだ。そこからヨーロッパの学問体系が始まったというふうに考えていいのではないのでしょうか。

そこで考えたのです。キリスト、マホメット、仏陀、その他数々あるけれど、世界で新しい宗教というものを最初につくったオリジネーターの人たちは、当時どの人もヒーラーだったのではないのでしょうか。いまでいえばお医者さんだったと思うのです。この人たちは手がざしとか、祈りだとか、瞑想だとか、気を送ることで、それぞれ病気を治せたのです。だから人々はこの人たちのいうこと、彼らの説く教義を、深く信用したのだと思うのです。そうでなければ、例えばキリストの「汝の敵を愛せよ」なんて、そんな間尺に合わないことをみんなが信じるはずはなかった。人々が信仰に入ったのは自分の大変な病気を治してもらったからだと思うのです。だからみんなが真剣に信仰したのです。恐らく偉大な宗教家というのは全員偉大なヒーラーだったのです。みんなが彼らの神を信仰し、彼らの説く教義を広めたのはそのためだと思います。

それは何千年も前のことです。当時は勿論いまのMRIもない、CTもない、レントゲンも心電図も何もないのです。ではどうしたら、この人が病気だとわかったのか。その原因をつきとめて治療することができたのか。それは顔色を見て判断した。顔色を見て、何かちょっとおかしいな。触ってみて皮膚がザラザラだとか、腫れているとか、舌をみると色が変わっているとかです。脈をとって、またお腹を触ってみる。そしたら通常よりちょっとおかしくなっている。そこから推論をするしかなかったのです。そこでどう治したかです。さすってみたり、もんでみたり、それこそ気を入れたり、祈ってみたり、もしくは瞑想したり、呼吸を調整してみたりです。はりや灸も使ってみた。それしかなかった。CTで調べるとか、レントゲンを撮るとができなかったわけです。いまのような近代的な医療行為をとることができなかった。それでもとにかく治したい、治りたいと、そういうふうに一生懸命やってきた。薬だってない。だからいろいろ試してみた。この草は効いた、これはだめだとか。そういうことをいろいろ経験を積みながら効果的な方法を選んできたと思うのです。それが東洋医学であり、薬草療法ではないのでしょうか。

西洋医学が現在みたいな形になって発達してきたのは200年かそこらです。しかしその間の進歩はべらぼうに速い。短い間に成し遂げた欧米医学の進歩は大変なものだと思う。だからとって、人間が何千年か何万年かかかって考えて、いろいろな経験をふまえてきてことを蓄積してきたものの集約が東洋医学です。それは伝統医学であり、エビデンス・ベースト・メディスン (EBM) として、何千年もかかって得た経験知ですから、あんなものは荒唐無稽だといって捨ててしまうのは、もったいないと思うのです。何千年もの間にエビデンス・ベースト・メディスンで、我々の先輩がずっと築き上げてきたことを、CTやMRIやレントゲンがあるから、あんなものは全部無視してしまえなんていうのはもったいないことです。

魂が先か、物が先かももう一度考えてみます。こういう物体だって、どんどん細かく分けてしまえば、原子になり、そして素粒子になり、クオークになり、そこから先の解明にはひも理論とかがあるよ

うです。このようにどんどん追求していくと、その先に精神とかエネルギーとか、それを生命情報とっていいような気がします。やっぱりそういうものが根源的にあるのではないのでしょうか。だれが宇宙をつくったかということは、これまた私にはわからない。山形県に草木塔というお墓があります。東北の土着信仰として、木にも草にも、鳥や動物だけではなくて、生きているもの全部に霊があるという信仰なのです。しかし人間が生きていくためには、草や野菜を食べなければなりません。木を切らなければ家が建たない。人間の生活のためには多くの草花の犠牲がある。その霊を慰めようというのが草木塔なのです。こういう土着の塔が東北のあちこちにある。その一つに碑文を書いていらっしやいます。

私はこのように、物全部に心がある、霊があるというふう考える方が、生きていくで夢があって楽しいと思う。

いまイラクで戦争が起こるかどうかの瀬戸際です。私は21世紀はああいう一神教の世界ではだめだと思ふのです。あれはまさに一神教の世界の国の戦いです。イエスという最高善の正しい神がおって、その対極に悪魔がいる。そういう対立する宗教観がなぜ生れてきたかという、アラブの世界では広大な砂漠の中で、何も無いのです。だから頼るものは、ひとりの絶対善の神様だけなのです。この絶対神に従うというのが、まさに一神教です。この神は対立する悪は殺せと言う。まさにブッシュのアメリカがそういう感じになっています。ところが日本は違う。我々の村には、どこにも鎮守の森があって、そこに神様がいます。日本はどの鎮守の森にも神様がいらっしゃるという汎神教なのです。日本人は豊かに緑滴る自然の中に生まれ生活してきたから、そういう信仰になっている。私は21世紀の世界を平和に導いていくのは一神教の世界ではないと思います。あの厳しい砂漠という地で生まれた強烈な絶対神の一神教ではなしに、日本人は豊かな自然に生きてきたから、その自然の中にも数多くの神様がいらっしやるといふ多神教になったと神社本庁統理で最近まで伊勢神宮の大宮司をされていた久邇邦昭さんが言われた。多様な生き方を寛容に説く精神世界が日本にあるのではないかと思います。ですから21世紀に日本の果すべき大事な歴史的革命があるのではないかということです。

今の日本に何が足りないのでしょうか。皆さん景気が悪いと言う。なぜ悪いのでしょうか。だれも投資をしない、物を買わないから不景気になる。だから減税をしろ、もっと日本銀行に金をばらまかせろ、そうすればみんなが物を買おう。インフレを目標にすしななければならないとおっしゃる政治家や財界人が多くなった。冗談じゃない。いま日本人はなぜ投資をしないのですか、それは投資をする気がないからです。投資するためには、土地を買って、工場を建てて、いい機械をそなえて、そしていいものをつくって皆さんに提供しようという思い、気がなければ、投資なんかはしないわけです。なぜ人々は消費をしないのですか。いいものを買って、いい生活をする。家族で幸せに暮らそうという気がなければ、物を買わないでしょう。その気もないのに日銀がお金をばらまいたら、どうなるのです。お金だけがだぶついて投機に走ってしまいます。これは再び虚のバブルの高揚になって、それこそいつかきた道を辿ることになります。

いま大事なものは本当はいい「気」なのです。日本に気がなくなってしまった。小泉純一郎という人は妙な人です。自分はやる気だと一生懸命言っているんだけど、彼が頑張れば頑張るほど、周囲は何か全部気がなくなってしまふ。第一自民党自体がばらばらでしょう。自民党がばらばらで気がなくなるのはいいのだけれども、政権交替すべき民主党までどうも気がばらばらでしまっている。国中みんなから気がなくなってしまった。いま本当に大事なものはいい気なのです。いい気があって、物がつくられて、物が売れて、投資が興ってきて、それで経済が繁栄するのです。

国民の健康にもこれはやっぱりいい「気」がなければだめだと思います。国民一人ひとりに健康になる気がなければだめなのです。勝手な生活をしていて病気になったら、健康保険があるから病院に行ったら何とかかなと思っている。これでは健康がよくなるはずがないのです。こんなことでは病院ばかりができてしまう。高度医療で金ばかりがかかる。そこで健康保険は破産してしまいます。国民の健康が大事だったら、健康になるという思いを国民みんなが持たなければなりません。そのための努力をしなければなりません。みんなが元気で楽しく長生きするという、そういう強い気がなければ、国民の健康などは保持できない。日本の医療制度も崩壊してしまいます。

だからみんなで強くて正しい気を出そうということです。そのためにも東洋の伝統的な医法の根幹にある生命エネルギー(情報)医学を真剣に学ぶ必要があるのではないのでしょうか。私は柔整鍼灸という仕方は生命エネルギー(情報)システム工学であると定義付けております。これは、これから大きく発展するポテンシャルのある科学領域であると考えています。国民の健康を正すための本当にいい気をこのシンポジウムのみなさんとともにここから出していきたいと思います。